
千億帝国物語 (銀河英雄伝説二次創作)

マイケル・ソイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千億帝国物語（銀河英雄伝説二次創作）

【コード】

N09680

【作者名】

マイケル・ソイ

【あらすじ】

銀河英雄伝説の世界に転生した彼が望むのは……

伝説的なスペースオペラを舞台に、自己中心的な主人公は踊る。

開幕のベルは鳴る

騒々しくドアが開き、寝室に飛び込んできたのは執事のオイゲンだった。

その顔は真っ青を通り越して白くなっている。震える唇は乾いてひび割れ、焦点の合わぬ目で俺を見つけると、何かを言おうとしてそれを飲み込んだ。

時間は深夜二時。そんな時間に執事の教科書としてそのまま使えるほどの、忠誠と能力を持つオイゲンがノックも無しに入ってくることは、それだけで異常事態だ。

焦り混乱して、呼吸困難気味のオイゲンを落ち着かせるため水を一杯飲ませ、ゆっくりと深呼吸させてから促すと、それでもまだ言い難いのか、ぼつりぼつり吐き出すように語った。

「お、落ち着いてください。旦那様が亡くなりました」

「父上が？」

「事故だそうでございます。恐らくはエンジントラブルで航行不能になったかと」

「つく」

るものか。その様子だと通信機や救難信号発生器も全部壊れたと言っただろう?」

「……左様でございます」

「そういうのは事故とは言わん」

そういうのは謀殺と言うのだ。

そう言い切れるほどこの世界で宇宙船の事故は少ない。そもそも、デブリ対策が完璧な宇宙船は衝突事故が無い。事故といえば他にも離発着のトラブルが想像されるが、それだつてこの百年の間で数十回しかない。だから宇宙船事故の99%を占めるのが、宇宙船部品のトラブルだ。人間の手で船が作られる以上、核融合炉をはじめ、重力制御装置、慣性制御装置、亜空間跳躍装置など、航行に支障をきたすトラブルは必ず起きる。しかし、違法改造している民間船じゃあるまいし、軍船以上のチェックを潜り抜けてきたしかもそうして精査して部品を選別したエンジンを4つも積んでいる貴族の船がエンジントラブルなどありえるはずがない。そう、ありえるはずが無い『エンジントラブル』おまけに、セットでかならず『通信機トラブル』と『救難信号トラブル』がついてくる。そして、その被害者は必ず『トラブルを抱えていた人物』か『有力な貴族』なのだ。

「捜査状況は?」

「絶望的とのことだ」

「俺に覚悟しろと?」

「はい」

そりゃそつだ。

宇宙で難破など、それこそ文字通り天文学的な生存絶望率である。それでも被害者は貴族なので、警察も少くない労力を割くだろう。そして泣き崩れる十歳の息子 俺に、不甲斐ない警察です

まないとかなんとか言って終わりだろう。

しかし、俺の視点で言えば始まりである。

警察は両親の死を覚悟して欲しいといったつもりだろうが。

「覚悟すべきは戦いの秋が来たことだ」

「坊ちやま。戦いの秋とは物語の終わり　クライマックスの戦いで使う言葉でございます。これから物語の幕が開ける今使うのは用途間違いと存じます」

「細かいことは良い。オイゲン、いくさだ。有価証券を換金しろ。屋敷の美術品も売り払え。軍資金を集める」

伯爵家　それも、辺境に位置するがため、自由惑星同盟との前線としてフェザーン自治区にも匹敵する独立性と、侯爵に匹敵する広大な領地を持つ辺境伯と言われる貴族。そんな家の当主が死んだのだ。

これは間違いなく荒れる。

おもわず口角が上がるのを自覚する。

「オイゲンよ、知っていたか？　俺は金儲けも好きだが、戦争にも目が無くてな。それも、誰かに言われて大砲をぶつ放すより、自分の手で火を投げ込みたい性だ」

「ヒトデナシでございますな」

「そんな主は嫌か？」

「まさか」

俺に釣られてか、オイゲンの口角もゆっくり上がる。

一分の隙も無い完璧なタキシードの腰を折り、優雅に一礼を取った。

「私めも『悪魔で執事』でございます。ヒトデナシの主は好むと

「ころでございます」

本当に頼りになる奴だ。ボルソルンの悪魔と呼ばれたコイツに出会ってもう七年か。こいつがいなければ幼い俺は父上に殺されていたかもしれない。しかし、頼りになるが同時に危険な男だ。

そもそも出会いからして衝撃的だった。俺の目の前で前の主を殺したのもこの男なのだ。その人物はこう評していた「オイゲンは誰にも飼いなさらぬ獣。いや、野生の龍だ」と。その通りだと思う。そしてこの龍を縛る鎖は何も存在しない。だが、それが良いというキチガイも確かに存在するのだ。

龍の背に乗るは龍の好奇心に寄るのみ。龍の好奇心が俺を食らうことに傾いたなら、ためらい泣く俺の命を奪うだろう。

何というスリル。一度死んだ身ではあるが、やはり命を賭けるというのは金銭に代えられぬ快樂がある。

そして命をチップに目指すは至高の座だ。

「主任弁護士は先代様の匂いが強すぎるため、私の独断で処分しておきました。後任の選定は済んでおります」

「そうか。それでは國務尚書と典内尚書にアポを取れ」

「畏まりました」

「あと、社会秩序維持局もだが、ここは局長ではなく、副局長が良いな」

「たしか、ハイドリツヒ・ラングという男で？」

「そうだ」

「畏まりました」

「何故とは聞かんのだな？」

「聞くことは執事の職務ではございません」
「なるほど」

本当に有能な奴だ。

さあ、手札は三枚。

オイゲン。

辺境伯家。

そして、原作知識。

金髪君よ。

思う存分ゴールデンバウム帝国を篡奪するが良い。

俺はそんな中古は要らん。

フェラーリよりも、フェラーリを越える車を作りたいタイプなん
でな。

十年待った。

本当に長かった。

しかし、幕が開いたのだ。

愛と感動と憎しみと謀略のオペラ。

いや、喜劇。

あの偉大なスペースオペラを、俺という異分子が灼熱の喜劇に変
えてやるう。

「ところで、獲物を横から攫われるというのは、なかなか頭にくるな」

「左様で」

「犯人の目星は？」

「なにぶん敵の多い方でしたので」

「息子にまで狙われるような男だからな」

開幕のベルは鳴る(後書き)

主人公の名前どうしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0968o/>

千億帝国物語（銀河英雄伝説二次創作）

2010年10月9日08時23分発行